

霧島連山縦走

韓国岳～獅子戸岳～新燃岳～中岳～高千穂峰

岩井 淑

1989年11月18日、宮崎県延岡市で友人の市政孝行君が結婚式を挙げた。その結婚披露宴に出席後、5泊6日で九州南部の山々を歩いた。このレポートは11月19日～21日にかけて宮崎県と鹿児島県の県境に位置する霧島連山を歩いた時のものである。

11月20日(月) 快晴

昨日の夕日に照らされ輝いていた樹氷をカメラにおさめようと勇んで準備をし、7時30分に宿舎を出発したわけだが、あれほどキラキラ輝いていた樹氷は影も形もないではないか。1晩ですっかり消滅してしまったのだ。こういう事態に直面すると改めて九州地方の暖かさを実感する。

気を取り直して登山届けを提出し、韓国岳への登山を開始する。

昨日、あれ程までに美しかった樹氷はすっかり解けてしまったが、登山道はガチガチに凍結している。高さが増すに従って解け残った雪も多くなってくる。

登り始めて30分で見晴らしのよい5合目に到着した。振り返れば、昨日登った甑岳が小さいながらも端正な山容を現し、白鳥山の足元に紫白池、六観音御池、不動池が散在し、西側を眺めれば、なな、なんと、噴煙を大空高く吹き上げている桜島山が見えるではないか！その麓をとりまくように錦江湾が霞がかかった中に静かに見える。初めて桜島山を見たのは、丁度20才の時だったから21年も前の事だった。それから数えて3回目になるが、相変わらず噴煙を吹き上げ続けている。

一休み後、登山を再開すると日陰に残る樹氷が少しづつ登場し、朝日にキラキラ美しい輝きを発揮しだす。右手に日本最大の火口湖である大浪池が見え始めると頂上までは、あと僅かである。それにしても遠く桜島山を眺める大浪池の風景は見事なものだ。

正面に突然、円錐形をした高千穂峰が眼に飛び込んで来たのは、それからまもなくであった。すぐ手前には新燃岳(しんもえだけ)も見える。新燃岳は活火山のため火口の西側からは噴気が上がっているのが見える。新燃岳の茶色と高千穂峰の紺色とのコントラストが見事だ。今、太陽は高千穂峰の真上にある。

韓国岳の頂上は黒々とした溶岩石で覆われ、僅かに草が岩影に根着いているのみである。霧島連山一の標高1700mの韓国岳の頂上は掛け値なしの360度の大自然のパノラマ。風も凩いだ穏やかな晩秋の陽射しを浴びていると、ウツトリと何時まででも眺めていたい風景である。

去り難い気持ちを残しながら、御鉢の外輪を半周する形で獅子戸岳、新燃岳への縦走路へ踏み込む。最初はガレ場だがやがてクマザサの中へと入って行く。韓国岳への登りは北面だったため凍結していて登り易かったが、今度の下りは南面のため解けた雪や霜柱でものすごくスリッパしやすいため、非常に注意深く下らなければならない。それでも2度、3度とスリッパを繰り返す。滑落する心配は全くないが、捻挫には充分注意しなければな

らない。

左前方に大幡池を眺めながら30分で1700mから1300m地点まで下り、再び1429mの獅子戸岳へと登り返すのである。5cmを超す霜柱や解け残った雪を踏みながらのコースのいたる所にミヤマキリシマツツジが群生しており、6月の開花期には紫紅色も鮮やかに見事な景観を表出することだろう。等ということであれこれ考えている内に1時間ほどで獅子戸岳頂上に到着してしまった。

振り返って見る韓国岳は、北面から見る爆裂火口も露なダイナミックな山容とはかけ離れ、上部までをクマザサに覆われた丸く静かな姿を現している。山容というものは眺める方向によって次々と形を変えていくものであるが、それにしても韓国岳の場合は極端である。獅子戸岳の南側には指呼の間に新燃岳が、更に南に高千穂峰が一段と高くそびえている。新燃岳の登山道はツツジが一面に生い茂る中を一直線に頂上に向かっている。ここからの距離から考えると30分もあれば山頂に到着するだろう。

予想通り30分で新燃岳山頂に到着して火口底を覗き込むと、そこには今まで見てきた池の色とは違う黄緑色の池が見えるではないか。美し〜いと思った。と同時に茶器に入っているお茶を連想した。

火口では噴気を吹き上げており、いくつあるのかと数えてみると12カ所あった。韓国岳への登山口に「新燃岳は火山活動中のため、絶対に火口に近付かないで下さい」との環境庁の立て看板があったのを思いだし、なるほどとうなずく。

新燃岳から中岳への登山道はカヤトに覆われ、微風にそよぐ姿からはかつて大爆発を起こしていたこととは程遠いイメージである。また、中岳も全山がカヤトに覆われた穏やかな形をしている。南方にははいよいよ高千穂峰が右側に御鉢を従えて立ち上がっている。この中岳から眺めた高千穂峰が1番いい形に見えるのではないだろうか。双眼鏡で覗いて見るとレンガ色のガレ場の登山道が頂上へと延びているのが見える。この中岳からは一度、高千穂河原まで降りて登り返して3時間の行程だ。今日の縦走の最終目的地はもうすぐである。

ここらで昼食にしよう。

昼食といっても行動食なので、ガスコンロとコップをザックから取り出しコーンスープを作り、後はカロリーメイト4本で終わりである。

12時に中岳を下り始めると登山道はやがて霧島研究路の石畳の道へと変わり、40分程で高千穂河原へと降り立つ。7時30分の出発から約5時間、縦走路を歩いて来たわけだが、1人の登山者とも行き交うことはなかった。

水道でうがいをし、水筒に水を補給した後、環境庁が設置している『高千穂ビジターセンター』の人に高千穂峰への登山口を尋ねると「鳥居をくぐって行かれてもよいし、あちらからでも登れます」と指で示してくれ、「多くの方が鳥居の方向から行かれますよ」と続け「縦走をしてこられたのに、これからまた登られるのですか？ 元気ですね」と言って激励してくれる。

2度目の登山届けを提出して高千穂峰への登山を開始する。

神社の鳥居をくぐってしばらく行くと霧島神社跡の説明文と共に4年前に再建された神社が建っている。説明文によると霧島神社は最初、高千穂峰に建てられていたが噴火によって消失し、説明文の立てられてある場所へと移動されて再建されたが、それも再度の噴火

により消失したため、もっと麓の現在の場所へと移動されたとの事であった。

その神社を横目で見ながら石畳の霧島研究路を進むと、やがて高千穂峰への登山道が左へ分岐している。20分程で森林限界を突破しいよいよ赤茶色の砂れき帯に突入する。非常に歩きづらい。足を踏み出してもズズッと戻ってしまうこともしばしばである。草木は1本たりとも生えてはいない。なるべく岩場を探して登るようにして20分。ようやく御鉢の縁にたどり着く。この火口は今日いくつも回ってきた御鉢の中では最大のものであり、赤と黒の縞模様の断層をハッキリ見ることが出来る。ここでも微かに噴気が立ち上っており、硫黄の臭いが鼻につく。雪が僅かに残る火口底まで降りて行くこともできるが、縦走をしてきた足にはこたえるので下へは降りずに御鉢を半周し、いよいよ今日最後の登りに取り付く。あと30分も登れば山頂にたどりつく予定だ。ここらに生えているのは丸く固まった草が僅かにあるだけであった。高千穂峰への最後の登りは登山道というものが整備されてなく、自然発生的に登山者が登りたい所を登ったのが踏み跡となっているので、それを探しながら頂上を目指してまっすぐに登って行くことになる。『落石に充分注意』の立て看板が眼に飛び込んでくる。

高千穂連山の場合、標高でいえば1700mの韓国岳が1番高く、次が1574mの高千穂峰であるが、韓国岳の場合は1200mのえびね高原からの標高差は540mであるのにたいし、高千穂峰の場合は960mの高千穂河原からの標高差は614mあるので、1番辛い登りとなる。しかし、この登りも高千穂河原から1時間30分で頂上まで登ることが出来る。

山頂からの展望は北面には昨日登った甑岳から、今日縦走してきた韓国岳、獅子戸岳、新燃岳、中岳が連続し、更に高千穂河原を挟んで高千穂の御鉢へと連なる山々が一望に手に取るように見ることができ、まるで火山の見本市を見ているような感じである。暫く今日歩いてきたコースを眼で追っていたが、1574mの山頂には中央に積み石塚のような形式をとった所に鉾が突き刺さっている。その手前に『天孫ニニ杵尊降臨之霊峯』という碑が建ち、「御神前」と書かれたステンレスのさい銭箱が置かれている。突き刺さっている鉾の意味の説明板は立てられてから時間が経ちすぎたためにほとんど読めないが、どうにか読んでみると次のように書かれてあった。

《 天の逆鉾・・・天孫ニニギノミコトが天下りされる時鉾を逆さまに建てられたといわれるもので長さ138cm周り〇〇の銅〇鉄い〇れとも判別できないものといわれ、上端に2つの面相がある・・・環境庁、宮崎県 》

また、大理石の『霊峯 高千穂峯 海拔一五七四米』の石柱が建てられ、1962年3月に設置された方位図がある。その方位図には次のような歌が刻み込まれていた。

「葦原野瑞穂御玉のゆさけきは天津御祖のをかけおりけ るり」

一方、南面には桜島が薄いシルエットを浮かびあがらせ、ベタ風の錦江湾は西日に映えて金色に輝いている。本当に静かな光景である。

九州の山々は真冬であっても積雪は少ないので、どの山にも登ることが出来るとは聞いており、今回は山小屋利用の山行であるが、万一のアクシデントに備えてビバーク用のシュラフや衣類、食器や食料もザックの中に詰め込んであるので、縦走して来るとかなり体にこたえるが、空気の透き通った景色を眺めていると、そのような疲れが体から抜けていき、生気が沸き上がってくるように感じる。

宿泊は山頂小屋である。

赤いトタン屋根の平屋作りの小屋は山頂の東側に建てられている。7～8cm程の引戸を開けて中に入ると、奥行きは10m位であり最初の3m程は土間の通路を挟んで右側が台所、左側が塵を被ったような土産物が少しばかり並べられ、併せて『登頂記念記録簿』が置かれている。次の3m程は木製の机と椅子6脚、石油ストーブ等が置かれた休憩所兼食堂であり、その奥に2段の蚕棚のベットが作られている。

天井には明り取りのために天窓が3カ所開けられており、その天窓からの採光による太陽電池による発電によってバッテリー充電が出来るようになっている。通常で17Vの電源を確保できるといい、TVを始めとして麓で生活する家族との連絡用のアマチュア無線や室内灯等の電源となっている。これらの電気器具を見ていると太陽電池の利用によるランプ生活からの解放は山小屋の生活パターンに非常な変革をもたらしたことがうかがえる。

この山小屋は昭和9年の創立であり、現在の小屋番の石橋利幸さんは67才。2代目のオーナーとして、すでに42年の長きに渡って小屋番をしているという。白い顎髭をたずさえて耳当てのある焦げ茶色のビニールでできた防寒帽を被り、静かに話す石橋さんによると、この高千穂峰登山は日帰りコースなので夏冬に関係なくほとんどの登山者は泊まることなく、宿泊者は希だという。

大相撲に『逆鉾』という鹿児島県加治木町出身の力士がいるが、彼が小学生の時この山に登り、角界に入門以後、シコ名を付ける時にその当時の事を思いだして『逆鉾』とした等という逸話も話してくれる。

この山小屋でビックリしたのは寝る段階になってである。何に驚いたかと言うと、2階の神棚の正面に布団を用意してもらったわけだが、その神棚の御燈明は直径7～8cmはある大ローソクなのだが、そのローソクの熔けたかすが丁度、山羊の螺旋状に回っている角と同様な形になっていたことである。それも左右がシンメトリーの形となっているではないか。どうみても不思議な形をしているので思わず石橋さんに尋ねてしまった。「どのようにして、こういう形を作ったのですか？」と馬鹿な質問をしたら、ムツとしたのか「自然になった」とだけぶっきらぼうに答えてくれたのみであった。普通、ローソクの燃えかすは立っているローソクに添って垂れ下がるだけなのだが、このローソクは渦巻いているのだ。なんとも理解しがたい形をしている。また、このような形を人為的に作ろうと思っても簡単には作り出せそうにない形でもある。これを見ることが出来ただけでも山頂小屋に泊まった価値はあるというものである。

明日は雲海の彼方からの御来光を拜んだ後、霧島神宮で遊び、開聞岳へ向かう予定だ。

1989, 11, 20, 記,